



## 新センター長・副センター長 就任のご挨拶

教育推進部教授  
センター長 **岩崎 千晶**



外国語学部准教授  
副センター長 **植木 美千子**



この度、教育開発支援センター長に着任しました岩崎千晶です。これまで関西大学の教育理念である「学の実化（がくのじつげ）」を大切にしながら、教育の質向上と学習支援の充実に向けて尽力してまいりました。今後も、本学の教育力をさらに高め、学生の学びをより豊かなものにするべく、教育をよりよくするための取り組みを推進します。

教育開発支援センターは2008年10月1日に設置されました。本センターは本学における教育の質向上に向けた全学的な教育支援体制の構築と、組織的かつ継続的な教育内容及び教育方法の改善（FD活動）を使命としています。私は教育工学を専門とし、大学教育における学習環境のデザインに関する研究を進めてまいりました。また教育推進部には高等教育開発、教育社会学、教育心理学を専門とする教員が所属しております。私たちはそれぞれの専門性を存分に活かし、この重要な使命の遂行に力を尽くしてまいります。

また関西大学におけるFDは、「建学の精神および教育理念のもと、学部・研究科等の教育目標を実現するために、個々の授業やカリキュラムの質向上、及び全学的な組織や学習・教育環境の整備等について、教職協働や学生参画により推進するとともに、それらについて継続的に検証を行い、さらなる改善に活かしていく活動」と定義しています。

具体的には次のようなFD活動を行っています：

1. オンデマンド講義映像の提供や対面ワークショップ・セミナー等の研修企画・運営
2. 関西大学高等教育紀要の発行などの教育研究
3. 学部や教員からの教育制度設計、カリキュラム、授業設計、教材開発等に関する相談
4. 教育ガイドブックやeラーニング教材などの教材開発
5. ニュースレターやメルマガによる情報共有

これらの多様な方法を採用しているのは、教員の方々のニーズや状況に応じて参加しやすい形を提供するためです。気軽に取り組めるものから、じっくり時間をかけて取り組むものまで、様々なスタイルを用意し、教職員が参加しやすい環境づくりを心がけています。FDの実施にあたっては、教育開発支援センターが学部・研究科等と連携しながら進めています。

さらに本センターでは、教育改善とともに学生の自律的な学びを支える学習支援活動にも力を入れています。TA、LAといった学習支援スタッフの制度整備や育成、ライティングラボの運営など、教育改善と学習支援を一体的に捉えた取り組みを展開しています。

このように、教育開発支援センターは、これからも教職員の皆様と共に、学生の学びをより深く、より豊かにする取り組みを推進してまいります。皆様のご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

教育開発支援センターの副センター長に新たに就任した植木美千子です。この重要な役割を担い、大学教育の質向上に寄与できることを心から喜びに感じております。教育開発支援センターの使命は、教育の質を確保し、向上させることにあります。特に、少子化と情報化が進展する中で、関西大学の優れた教育実践（Good practice）を可視化し、その価値を社会に発信して関西大学のプレゼンスを高めていくことが重要です。近年、Chat GPTなどの生成AIの出現が教育業界に新たな波をもたらしています。この技術に対する反応は、否定的な見解から大いに歓迎する声まで幅広いですが、教育研究機関としては、この革新的な技術が提供する無限の可能性を探ることが必要だと考えています。生成AIは、個別最適な学びを推進し、学習者一人ひとりのニーズに応じた教育が可能になるという点から、教育の質を変容する力を持っています。私はこれまで外国語教育を専門にしており、学習者の動機づけや不安などの心理的側面からのアプローチについてや、教育実践における学習者エンゲージメントを高める授業デザインについて研究してきました。生成AIには多くの可能性がありますが、一方で、AIに依存することで受動的な学習態度やマインドセットの形成が促され、学習への積極的な関与が減少するリスクも存在します。生成AIの利便性を活かしつつその副作用を減らすためには、授業の中でいかに「学習者が自ら考え、行動するプロセス」を上手に取り入れるかが、有効な解決策となります。そのため、教員には、授業をどのようにデザインし、学びを生み出すかが今後、ますます重要になってくるでしょう。私は自身の専門知識を活かしながら、どのような授業運営や環境がエンゲージメントを高めることに寄与するのか考えていきたいと思っています。また、この取り組みを外国語教育の枠を超えて展開し、さまざまな学部の教員と対話を重ねながら、それぞれの学部の学びに適した生成AIの活用方法や、より良い教育のあり方も探求していきたいと考えています。教育の質を高めるためには、教員が自身の授業方法を見直し、学生にとって最も効果的な学習環境を提供することが不可欠です。FDの活動は授業方法の改善に留まらず、教育の全体像を把握し、その成果を学生及び社会に還元することに焦点を当てています。皆様のご協力とご支援を賜りながら、関西大学の教育がより一層の高みへと進化するよう、尽力して参ります。

## 名物教師の登場

教育推進部教授 三浦 真琴

旧聞に属する話で恐縮だが、1996年に封切された映画「チェーン・リアクション」には水素エネルギー開発に取り組む実験室が登場する。それはアメリカの大学史を知る人間なら容易に推察し得るシカゴ大学のスタジアムの地下にある。実際にこの場所ではマンハッタン計画に基づく原子炉の臨界実験が執り行われた。そこが選ばれたのはカレッジスポーツの興隆を快く思わない学長がその使用を禁じたからである。ボートに始まるカレッジスポーツは19世紀終盤にフットボールに注目の座を譲る。以後、大学の講義室は授業時間であるにもかかわらず閑散とすること、しばしばであった。フットボールを観戦するために学生が大学してスタジアムに駆け付けたからである。しかし、もぬけの殻となった講義室を前に憤る教師は皆無に近かった。それはエネルギーを持って余して狼藉を働く若者を監視する役割から解放されたからだが、このほかに、研究に割くことのできる時間が増えたことを喜ぶ教師もいた。

ドイツ帰りの教師たちは彼の国流のゼミナールと研究の可能性を大学院に求めた。ジョンズ・ホプキンス、クラークなど、大学院を有する大学が創設されるに連れ、教育よりも研究を重視する教師が増え始めた。とはいえ、大学の機能が研究一辺倒になったわけでも、教師が全て研究者になったわけでもない。

ドイツを追い越せと研究に専念する教師がいる一方で、ハーバードのローエル（James Russell Lowell）のように、研究など古切手の蒐集と同じことだと研究中心主義を批判する教師もいた。また、この頃には授業に対する考え方に大きな変化が見られた。学生の中に眠っている知的好奇心を呼び覚まし、知的な感動を与えるのが教育だと考え、講義室に溢

れんばかりの受講生を集める教師が登場したのである。

大学史の書籍を紐解けば、そのような名物教師に関する記述が多数見当たるが、ここではハーバードのコーブランド（Charles Townsend Copeland）を紹介しておこう。コピー（Copey）の愛称で親しまれた彼は、ハーバード在職中、毎週水曜日の夜、自宅を学生に開放し、幾世代にも亘って伝えられる書物に潜む色彩、力強さ、美しさについて語り、ときにそれを再現してみせた。自分自身を発見するためにカレッジに入学した学生の良き相談相手でもあった。大学院の登場以降、ともすれば研究ばかりが注目されがちだが、青年に寄り添う教師の登場を看過してはならない。



James Russell Lowell  
(Wikipediaより/Public domain)



Charles Townsend Copeland  
(Wikipediaより/Public domain)

## 北米における生成AIの活用にかかわる 高等教育支援の動向と今後の展望

教育推進部教授 岩崎 千晶

近年、ChatGPTをはじめとする生成AIの急速な発展により、高等教育機関における教育・学習支援の在り方が大きく問われています。2024年に参加したAssociation for Educational Communications and Technology (AECT) では、AIリテラシーの体系化や教職志望者向けの生成AI教育プログラムの開発・評価、生成AIの教育的活用を支援する具体的な取り組みなど、時宜を得た研究発表が数多くなされました。

また、International Writing Centers Association (IWCA) がConference on College Composition and Communication (CCCC) と共同で本年4月に開催したセミナーでは、ライティングセンターにおける生成AIの活用に焦点が当てられました。具体的には、ライティングプロセスにおける効果的なプロンプトの提供方法や、生成AIを活用したライティング教育プログラムの開発などが議論され、教職員・学生向けの学習リソースも紹介されました。

米国の先進的な取り組みとして特筆すべきは、各大学における生成AIポリシーの整備状況です。パデュー大学では、各コースのシラバスに生成AIポリシーを明記することを求めています。ハワイ大学ではコースにおいて「使用禁止」「一部使用可」「一部必須」などの利用指針をアイコン化し、教員が容易に活用でき、学習者にとってわかりやすいように情報を提示しています。

このような国際的な動向を踏まえ、日本の大学においても、教育の質を確保しつつ生成AIに適切に対応するための方針策定が求められる時期が来る可能性があります。当センターとしては、ライティングラボとも連携をしながら、教育現場の多様な意見に真摯に耳を傾け、学術の本質を守る支援体制の構築を目指してまいります。各教職員の皆様におかれましても、このような課題について、ともに検討いただければ幸いです。

## 第30回関西大学FDフォーラムを開催しました

教育推進部教授 山田 剛史

2024年11月20日（水）、本学学生相談・支援センターと共催で、第30回関西大学FDフォーラムをオンライン開催しました。2021年に障害者差別解消法が改正され、2024年4月1日から障がいのある人への合理的配慮の提供が義務化されたことを受けて、「大学における合理的配慮の実践と学生支援のあり方を考える」をテーマに設定しました。事前申込者は200名を超え、当日はピーク時130名を超える方の参加がありました。今回、長らく発達障がい学生の支援に携わり、合理的配慮に関する専門知見を有しておられる西村優紀美先生（元富山大学保健管理センター客員准教授）に基調講演をお願いしました。西村先生からは、参加者から事前に寄せられた質問に回答する形で合理的配慮についての重要なポイントをご説明いただきました。また、個別面談の事例や連携による支援事例を踏まえて、発達障がいの特性がある学生への支援において、「対話を通して学生自身の自己理解を促進すること」「経験学習の機会を保障すること」の重要性を強調されました。

その後、学生相談・支援センターの事例報告を行いました。林宏昭先生（前学生相談・支援センター長）からの概要説明の後、神藤氏より、管理職の立場から、センター開設前の取組から開設に至る経緯、その後の取組まで11年間に及ぶ組織的な展開について紹介いただき、「学内でかかわる人・理解者を増やし、大学全体で人が人を支えあう」ことの大切さを伝えてくれました。次に、コーディネーターの藤原氏より、コーディネーターの役割や合理的配慮の具体的なプロセス、そこでのポイントと課題について詳細を報告してくれました。その後、モデレーター進行のもと、参加者同士のディスカッションを経て、登壇者とのパネルディスカッションを行いました。障がい学生支援部署とその他部署との連携のポイントや今後増え続ける障がい学生支援のための戦略・方法（ツール）、教員のセーフティネットの構築などについて議論を行いました。



左上から時計回り 西村優紀美先生（前 富山大学 保健管理センター 客員准教授）・林宏昭先生（経済学部 教授／前 学生相談・支援センター長）・藤原隆宏氏（学生相談・支援センター）・神藤典子氏（学生相談・支援センター）

## 連載<第1回>高等教育研究が拓く学びの風景 ～学びの主体を構築するフィードバックリテラシー～

教育推進部准教授 山田 嘉徳

高等教育研究の知見を教育実践に活かすヒントを、この連載では紹介していきます。

私たち教職員は日々、学生たちに様々なフィードバックを行っています。しかし、その実践の中で、「フィードバックを行っても、なかなか改善につながらない」という経験をされた方も多いのではないのでしょうか。高等教育研究において、こうした課題への解決策として注目を集めているのが「フィードバックリテラシー」という概念です。これは、フィードバックを受け取り、理解し、感情をコントロールしながら行動につなげる能力を指します（Carless & Boud, 2018）。

重要なのは、フィードバックリテラシーは教員から学生への一方向的な「指導」ではなく、学生自身が主体的に関わる「学び」として構築されるという点です。効果的な実践例として注目されているのは、評価練習ワークを通じて、学生同士が互いの課題を評価し合う機会を設けることです。このプロセスで学生は、他者の視点の重要性を理解し、評価の客観性や妥当性について深く考えるようになります。印象的なのは、学生自身が評価者の立場を経験することで、「なぜその評価になったのか」という根拠を考えるようになる点です。これは単なる評価技術の習得ではなく、学び

の質を高める重要な認知的変容といえるでしょう。

最近では生成AIによる個別最適なフィードバックを実現するオートメィティッドフィードバックが注目を集めていますが、生成AIの利活用の前提としても、このフィードバックリテラシーを育むことが重要だとする知見が蓄積されつつあります。フィードバックリテラシーの育成は、学生の自己調整的な学びを支援し、生涯学習者としての基盤を形成し、学生の学び損ないの機会を低減させるヒントを提供してくれるものと考えられます。今後も理論と実践の往還を通じて重要な教育的課題に注目し、学生のよりよい学びに資する知見を公開していきます。



講義型授業での関大LMSを用いた評価練習ワークの実践場面（左：ペアワークの様子、右：ワーク時の教示）

文献：Carless, D. and Boud, D. (2018). The development of student feedback literacy: Enabling uptake of feedback. *Assessment and Evaluation in Higher Education*, 43(8), 1315-1325.

## 卒業生寄稿

## LAから学んだこと

紙谷 健太 (2015年3月法学部法学政治学科卒業)

私が初めてLAと出会ったのは、学部2年生の秋学期に「大学教育論～大学の主人公はきみたちだ！～」の授業を履修したときだった。この科目のコンセプトが、今日の「University」につながる大学の起源であるボローニャ大学は当時、学びたいと願う人々が自ら中心となり運営されていた大学だったことを念頭に、大学の主人公は学生であり、学生が自らの大学生活における課題を認識して、自らの頭で考えて自らの手でよりよくすることだと知り、好奇心をくすぐられた、より平易な言葉で表すと「ワクワク」したことを今でも鮮明に覚えている。

この授業ではグループワークをより広く、より深みのあるものにするためのファシリテーターとしてLAが参加しており、翌年度から2年間、私自身もLAとしてこの授業に携わることができた。受講生一人ひとりの強みや特長、持ち味、グループ全体の雰囲気を感じ取りつつ、それらに応じたサポートやアドバイス、時には質問を投げかけたりすることを心がけた。1回90分、全15回

の限られた授業時間のなかで自分には何ができるのか、時には葛藤や悩むこともあったが、学生の主体的な学びや、学びの楽しさを支えることの意義を噛み締めつつ、教員やほかのLAとともに同じ目標に向かって創意工夫することができたのはかけがえのない経験となった。

大学卒業後は将来を担う学生の主体的な学びを支えたいという思いから、学校法人に就職し、教員や保護者など幅広いステークホルダーと協力しながら、職員として学生を主に教学面で支える仕事に携わっている。困難な場面につかることもあるが、問題と向き合い、当事者の意見を整理し、より適切な方向へ導くことができるよう考え行動することを常に意識している。これもLAの経験があったからこそだと言える。

ボローニャに学生が中心の大学が誕生してから約千年。この悠久の歴史や営みに思いを馳せつつ、私は今日も、「何か」を学びたいと願う学生を支えていきたい。

## CTL 掲示板

## 2024年度春学期のライティングラボ個別相談の利用状況

2024年度春学期におけるライティングラボの個別相談利用件数は739件となり、昨年度の同時期よりも増加しました。利用者アンケートでは、「ライティングラボに来室した目的は達成されましたか?」という設問に対し、98%以上が「達成できた」「まあまあ達成できた」という回答を選択しており、多くの学生がラボでの相談に満足しているといえます。

ライティングラボは高槻・ミューズ・堺の各キャンパスでも開室している他、Zoomでのオンライン相談にも対応しています。場所別の利用率は、千里山キャンパスのラボの利用が81%となりました。千里山キャンパスとオンライン相談以外のラボは、開室日が限られているため利用率は低くなりますが、一定数の利用があります。また、春学期には高槻キャンパスのラボが図書館のグループ閲覧室に移動しました。今後もラボの支援を必要とする学生に、ラボの取り組みが届くように周知を進めてまいります。

ライティングラボの個別相談で対応する文章は、卒業論文やレポートに加え、スライドやレジюмеなどの発表資料、志望理由書などの各種文書など多岐にわたります。今年度からは相談受け入れの範囲を

ライティングラボ アカデミック・アドバイザー 坂元 悠子

拡大し、博士課程後期課程院生の文章に対する支援を開始しました。すでに博士論文の構成や奨学金の申請書類などについての相談に対応しています。

ライティングラボでは、先生方の授業との連携も行っています。「利用指示」では、学生に課したレポート等の内容を事前に共有していただくことで、先生方のご要望をふまえた支援が可能になります。授業連携のご依頼は、下記QRコードからお願いいたします。なお、同時期に複数の「利用指示」をご依頼いただき、多くの学生の来室が見込める場合、利用期間の変更をご相談させていただく場合がございますことをご了承ください。

利用案内  
(教員向け)

## ●記事テーマ募集

読みたい、知りたいテーマなど、ご意見をお寄せください。  
編集事務局 [ctl-staff@ml.kandai.jp](mailto:ctl-staff@ml.kandai.jp) 宛、  
タイトル【CTL ニュースレター記事テーマ】と明記

## ●活動報告はホームページをご覧ください

<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/>



KANSAI  
UNIVERSITY

## 関西大学 教育開発支援センター CTL Newsletter

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-0230 MAIL: [ctl-staff@ml.kandai.jp](mailto:ctl-staff@ml.kandai.jp)  
<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/>

発行日/2024年12月16日 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター